

近松研究の「歴史社会学派」の後を考える

— 心中物における「孝行」の構築を例に —

What Comes After the “Socio-historical School” in Chikamatsu Studies:
The Construction of ‘Filial Piety’ as Case Study

Ruxandra Marginean

1 近松の作品研究と「歴史社会学派」（＝マルクス主義的文学批評）

近松研究は「伝記研究」（近松という人物の生涯の詳細）・「環境研究」（芝居興行の実態、先行芸能・同時代芸能との関連 など）・「演劇研究」（人形・三味線・舞台構造などの詳細）・「作品研究」というの四分野に大きく分けられると『江戸人物読本 近松』¹⁾にもとづいて言える。この分類のなかの「作品研究」という分野においては、広末保の『増補近松序説 — 近世悲劇の研究』（以下『増補近松序説』）²⁾が代表的かつ影響力のある業績のひとつとしてあげられよう。本稿では、こうした業績に見られる分析方法を位置付けし、考え直してみたい。

まず、広末保の『増補 近松序説』における作品の分析方法の位置づけを行ってみよう。そのためには、広末の論考及びそれが引き起こした議論などを詳しく取り上げた森修の「歴史社会学派」³⁾を参考にしたい。森は「マルクシズムの影響を受けて歴史社会的方法を確立したのが〔近藤忠義の〕『日本文学原論』〔1937年初刊〕であった」⁴⁾と指摘する。そして、戦後におけるその展開を紹介している。

つまり、昭和20年代後半 から30年代にかけての、広末保・荒木繁・森山重雄などの研究をも含めた歴史社会学派を取り上げ、それが「戦前の近藤氏（中略）の唯物史観にもとづくリアリズムの立場を受け継ぎながら、一方では、戦後の進歩的な歴史学の成果をうけいれ、それによる多くの新しい見解を打ち出した」⁵⁾と述べている。森の言うマルクシズムとリアリズムは、マルクス主義文学批評のことであると思われる。

マルクス主義文学批評の特徴は、周知のように、ある時代における階級構造（土台＝base）と文学作品（上部構造＝superstructure）とを結びつけて（後者は前者の反映であるというように）解釈している点にある。近松の作品研究におけるマルクス主義文学批評の影響について森は次のように述べている。近藤忠義の『日本文学原論』においては、土地経済（農民）と商品経済（町人）との関係が「土台」として考えられた上で、近松の作品が「農民的」・「道徳的」であると解釈されたと言う⁶⁾。また、広末・荒木などの研究⁷⁾においては、「戦後の進歩的な歴史学の成果」⁸⁾によって明らかにされた「農民の動向や町人間の新旧対立」という「土台」があり、近松が

こうした階級間の論争を描いたと解釈されたと言う。森はさらに、広末の論考は「資本主義の人間疎外に対して、農民出身の手伝いなどの中流以下の町人の抵抗」をみようとすると言う。そして森は、広末の諸説に対する歴史家中田易直⁹⁾の、町人階級における手伝レベルの者の抵抗が元禄時代にみられないという批判およびその指摘に対する広末の反論についてもふれている。

ここで中田への返答として広末が発表した「近松と町人倫理 — 文学史と歴史学」についてさらに検討したい。広末は次のように論じている。

町人階級は自らを守るためには、彼ら自身封建強化をしなければならなかったわけで、この自己矛盾は当然激化してござるをえない。(中略)つまり[中田]氏のいう町人の生活を破壊する行動にも人間的倫理は託されている。この町人自身の封建強化という悪矛盾に町人——とくに小町人たちが苦しめばこそ、近松の主人公たちの悲劇は観客の心をひきつけることができたともいえるのである。(中略)歴史学の方からいっても、恐らく、当時の商業資本の相対的な進歩性ばかりに気をとられて全体の相を見落とすことにならないだろうか。人間の倫理はいつもその全体と関係しあっている。少なくともすぐれた文学の反映する倫理的な欲求はそうである(下線は筆者によるものである)¹⁰⁾

つまり、実際に町人階級内の主人相手伝いの争いが元禄期に生じていたかどうかは別として、町人間にその階級内の矛盾の意識が「あったはず」だということになる。こうした広末の論は、次のように評価されている。

「これまでの歴史社会学派にみられた客観主義を克服して、文学固有のたたかい

を明らかにし、かつ民衆の抵抗のありかたをその矛盾と挫折のなかでとらえるという、これまでの図式主義を脱却したりアリズムの方法をうちだすことによって、方法的にも劃期的な意義をもつのであった」¹¹⁾(下線は筆者による)。

しかし、「あったはず」の町人の現実(=土台)(以上の引用の下線された部分)の文学への「反映」を唱えている広末の論と、その現実の歴史的確認を訴えている中田の論とは、平行線をたどっていると思われる。さらに、マルクス主義的リアリズムの立場を貫いている広末の考察とその考察を「文学固有の戦い」として位置付けている評価との間に、飛躍はないだろうか。

ここまで森などの考察に添って、「歴史社会学派」および近松の作品研究という分野の代表者である広末の位置づけについてみてきた。ここで一つ重要な課題が浮かび上がってきた。それは、「歴史」と「文学」との関係が後者による前者の「反映」なのか、如何なるものなのかという、中田・広末の議論において提供された課題である¹²⁾。

では、森の「歴史社会学派」にもどって彼の論考の結論をみてみよう。森は歴史社会学派には二つの課題が残されていると述べている。一つは「学派としての根本方法を明らかにする」ことである。もう一つは、「過去の作家・作品を歴史社会的に位置づけるには、当時の享受者の問題が重要な意味をもつ」ため、享受者の具体的な究明を行うことである¹³⁾。観客の究明が森の指摘どおりに重要だと思われる¹⁴⁾。以上のように、森は歴史社会学派において「方法論」と「享受者」の課題がさらに追求される必要があると指摘している。

本稿では、「歴史」と「文学」の関係という課題、および「歴史社会学派」における、

互いに関連し合っていると思われる「方法論」と「享受者」の課題について考えたい。これら三つの課題を把握するために一つの有効な視座を提供する。そして、その視座から心中物における「孝行」について考えたい。

2 マルクス主義的文学批評の方法論、およびその再検討

森が指摘しているように、近松研究における「歴史社会学派」の方法は、マルクス主義的文学批評のリアリズム論の影響を受けて成立している。また、戦後の広末などによる研究においては、以上で見て来たように、こうしたリアリズムの立場が根本的に受け継がれている。

しかし、マルクス主義的リアリズムはさまざまな観点から考え直されてきている。例えば、フランスでは、主に西欧文化の権力作用について考察したM・フーコー (Michel Foucault) の緒論、イギリスでは、主に文化研究者R・ウィリアムズ (Raymond Williams) やマルクス主義のイデオロギー論を再検討したL・アルチュセール (Louis Althusser) などの業績があげられよう。フーコーは、ルネサンス以降の西洋文化において「言語」と「現実」との関連がいかに関連されてきたか、またこうした関連をもとにどのように様々な社会的世界観が構築されてきたかを究明した¹⁵⁾。また、アルチュセールやウィリアムズは、マルクス主義における唯物論的観点からの社会論の限界を批判しつつ、その有益な側面を強調し、展開した¹⁶⁾。これら三人の論者の共通点は、「歴史」と「文学」の関係を考え直している点である。つまり、マルクス主義的リアリズム概念を覆すかたちで、彼等はテキスト (文学作品も含む) が歴史 (現実) を反映しているのではなく、現実を

把握する人間の認識を構築していると述べている。つまり彼等が、テキストが歴史を「作る」という立場をとっている¹⁷⁾。ここでマルクス主義リアリズム論とウィリアムズなどによるその批判についてみてみよう。

マルクス主義においては (経済的)「土台」(base) は、(文化的)「上部構造」(superstructure) を「規定」(determine) しているとされている。こうした見解は、マルクスの『経済学批判』(1859)における次の考察に基づいている¹⁸⁾。

人間は自らの生活の社会的生産に際して、避けることもできず、また自分の意志から独立した、一定の諸関係に入る。即ち、人間の物質的生産諸力の一定の発展段階に対応している生活諸関係に入るのである。これらの生産諸関係が社会の経済的構造を構成する。この構造が社会の現実の土台であり、この上に法律的、政治的上部構造が立ち、これに社会的意識の一定の諸形態が対応する。物質的生活の生産様式が社会的、知的生活の過程一般を決定する。人間の存在を規定するのは人間の意識ではなく、それとは逆に、人間の社会的存在こそが人間の意識を規定するのである (下線は筆者による)。

マルクスがここでいう「土台」による「上部構造」の「規定」は、いかなるものなのか具体的に述べられていない。しかし、この文脈が、後のマルクス主義者らによってどのように理解された。ある者はこれを単なる時間的な「前後」関係 (つまり、先ず物質的生産があり、その後政治と文化が生じる) であると解釈し、ある者はこれを空間的に区別され得る「下レベル」と「上レベル」との関係である (つまり、基に生産関係があり、その上に経済状況、またその上に法律と政治がある。そしてその上に人間の認識と様々なイデ

オロギー が成り立っている)と解釈した¹⁹⁾。

こうした図式的理解に対して、ウィリアムズは次のように述べている。「人間の社会的存在こそが人間の意識を規定するのである」というマルクスの指摘が正しい。その指摘から出発して「社会」と「認識」がいかなる過程においてどのように関係し合っているのかについて考察しなければならないと言う。ウィリアムズの作業によって開発されたのは、唯物史論的社會(文化)研究=カルチュラル・マテリアリズム(cultural materialism)という分野である。

ウィリアムズはまず「生産諸関係」がマルクス主義のいう「経済」=「商品生産」に限らないと言う。支配階級は経済的市場をつくと同時に、それを支える政治的・宗教的政策を取る。「学校」・「教会」・「刑務所」をつくり、物質的に一つの社会的秩序を生産する。従って、「政治」・「法律」・「文化」は「上部構造」ではなく、これらも「生産諸関係」の範囲に入るものである。しかし、マルクスが「ピアノを作るのは生産であるが、ピアノを弾くのは生産ではない」と主張し、「現実」(reality)の生産諸関係から「芸術」を切り捨てた。その結果、芸術の具体的な物質的な生産過程やその目的が見失われた²⁰⁾。そして、「芸術」による「現実」の「反映」論が唱えられた。マルクス主義においては、経済的「土台」が客観的に諸科学によって認識されるものである。それに対して、「上部構造」としての芸術はリアリズム論に従って「土台」を「正しく」「反映」しているとされた。「土台」を「正しく」「反映」していないときに、芸術が誤った認識=「イデオロギー」として位置づけられた²¹⁾。

ウィリアムズは、こうしたリアリズム論を克服するため、上下関係あるいは前後関係として理解された「社会」と「認識」との関係

を、まず、「言語」の位置づけという観点から考え直している。彼は、あらゆる社会関係に生まれて成長する人間が言語を習うことによってそれらの関係を把握する(つまり、ある価値観を受け継ぐ=人間が社会化されている)と言う。さらに、言語でもって認識されるこれらの諸関係について人間が自ら考え、行動する(これは個人的自由である)と彼が言う。従って、「現実」の「生産関係」が言語=認識において「反映」されているのではないと言う。現実の諸社会的関係が言語(language as practical consciousness)によって把握され、構築され、たえず(再)生産されているのであるとウィリアムズは強調する²²⁾。従って、作品が言語によってどのように現実の把握を構築しているかを示すのはカルチュラル・マテリアリズムの提供する文学作品の分析方法である。

ルイ・アルチュセールやミシェル・フーコーなどの諸論はここで詳しく取り上げないが、彼等の諸論とウィリアムズの論との共通点は、「現実の社会的構築」の認識である。そして、文学作品の位置づけについても共通している。つまり、文学作品が「言語によって現実の把握を構築して」いる。それによって、文学作品は諸社会関係の(言語による)構築と密接に関連しており、社会的秩序の保存・変化=「歴史」と切り離すことが出来ないものである²³⁾。従って、文学は歴史を「反映」しているのではなく、それを「構築」する要因の一つであると言えよう。

本稿において、「文学」と「歴史」の関係はいかなるものなのかという課題と、「歴史社会学派」において未解決の課題として森によって指摘された「方法論」と「享受者」の課題が浮かび上がったが、「歴史社会学派」のマルクス主義文学批評のリアリズムにとつてかわる分析方法を以上のカルチュラル・マ

テリアリズムなどに求めることによって、これら三つの課題の解決をみることができないだろうか。なぜならば、前述の通り、文学作品は現実を把握する人間の認識を構築しているという「方法論」が、「文学」と「享受者」との関係および「文学」と「歴史」との関係を示していると思われるからだ。

ウィリアムズ、アルチュセールやフーコーなどの論考は80年代以降のイギリスやアメリカにおけるイギリス・ルネサンス期の演劇の分析方法を改新する結果となり、「新歴史学派」(New Historicism)が生れた。その代表者として、S・グリーンブラット (Stephen Greenblatt), J・ドリモー (Jonathan Dollimore), C・ベルスィー (Catherine Belsey) があげられる。本稿では、新歴史学派の業績について詳しく取り上げないが、これらも近松研究における「歴史社会学派」の後を考える際念頭においておきたい。

続いて、心中物における「孝行」に焦点を当て、心中物における現実の構築について検討していきたい。

3 心中物における「孝行」の構築

心中物においては、主人公が死に向かう場面が必ずあり、通常それがさらに「道行」・「述懐」・「心中」という部分から構成されている。「述懐」では、家族や身近な人間のことが回想される。ここで言わば、死を覚悟している二人の、社会に対する思いが描かれている。近松の最初の心中物、『曾根崎心中』において、死に行く徳兵衛とお初が次のようにその心情を語る。

「我幼少にてまことの父母に離れ、叔父といひ親方の苦勞となりて人となり、恩も送らずこのままに、亡きまでもとやかくと、ご難儀かけん、勿体なや、罪を赦

してくだされかし (中略) 我らが父様、母様は、まめでこの世の人なれば、いつ会うことのあるべきぞ。(中略)はつが心中取沙汰の、明日は在所へ聞えなば、いかばかりかは嘆きをかけん」²⁵⁾

ここはまだ「孝行」という言葉が登場しない。そして、「南無阿弥陀仏」と唱えながら死ぬ二人に対して「未来成仏、疑ひなき、恋の手本となりにけり」²⁶⁾と言う楽観的な考えが見られる。

しかし、第三心中物の『心中二枚絵草子』において、「述懐」以外でも親類などへの思いが述べられている。例えば、「道行」のなかで次の文句が見られる。

「心中宿世の報いの業か、そのみならず親方や親の苦惱と思ひは知れど」²⁷⁾

そして、「述懐」において、

「一つ蓮と願へども、思へば我が身の咎、養子の親にうとまるる」²⁸⁾

とある。このように、市郎右衛門とお島は彼等の心中が親類の苦しみを意味すると分かっている。この点は、『曾根崎心中』と共通している。

しかし、『曾根崎心中』と同様、「孝行」の言葉が死に向かう二人の場面に登場しない。だが、この場面以外にも親類への気持ちが語られている。そのなかで「孝行」が次のように表れている。

「真実の親子にもまさつたる御恩徳、いつか報じ申すべき、疾くにもかやうに承らば、いかやうとも孝行の、つくしやうもあるべきに、悔しきよ、後悔きよ、(中略) 養親には不孝をなし、この市郎右衛門めは、(中略)せめて心の念願にて、死して二度親子と生れ、今の恩を報じたき」²⁹⁾

弟善次郎が親の金を盗み、兄市郎右衛門にその罪をきせる。そのため市郎右衛門が勘当と

なるが、この場面において以上の文句が見られる。親孝行ができなかったことへの悔しさから市郎右衛門がお島との心中を決意する。

「述懐」においてだけ親への気持ちが表わされている『曾根崎心中』に対して、『心中二枚絵草子』においては、親への思いは勘当の場面などにも表れ、「孝行」がしたいという気持ちが心中の動機になる。純粹に一緒にいたいという気持ちから心中する『曾根崎心中』の主人公と比べて重要な相違点である。そして、「南無阿弥陀仏」と唱えながら死ぬ二人に対して、二人の成仏を語る『曾根崎心中』に見られるような文句がない。

第四番目の心中物、『ひぢりめん卯月の紅葉』には後編の第六番目の『卯月の潤色』がある。夫婦与兵衛とお亀は『ひぢりめん卯月の紅葉』で心中をはかるが、お亀だけ死に、与兵衛が助かる。与兵衛は『卯月の潤色』において妻の後を追う。『ひぢりめん卯月の紅葉』において、『曾根崎心中』と似た形で「述懐」のなかで主人公の親や主人への思いが描かれている。しかし、『曾根崎心中』と異なり、死ぬことが「罪障」であることへの意識が強く、そのため地獄へ落ちるかもしれないという考えも見られる³⁰⁾。「孝行」という言葉は『曾根崎心中』と同様、見られない。しかし、後編の『卯月の潤色』において、「孝行」が表れている。まず、自殺することを覚悟した与兵衛が自分の思いを伝えないで死ぬのは「不孝」であると次のように語っている。

「涙もこぼれぬ死用意、むざんと言ふも愚かなり、待てしばし。大阪の叔父、在所の親、恩深き伯母のあり。狂乱したりと嘆きをかけ、不孝の罪も恐ろしや、一筆つつを残さばやと」³¹⁾

そして、自殺は「不孝」であり、そのゆえ地獄に落ちるだろうと次のように言う。

「一日尽せし孝行なく、不孝第一のそれがしを、勘当、不興もし給はず、いかなる合縁奇縁にや、親もおよばぬ御高恩、送りもやらず自害して、またもや嘆きをかけんこと、不孝の上の不孝の咎、日月の怒りを受け、堅牢地神は大地を破り、奈落へ沈め給ふべし」³²⁾

さらに、手紙のなかで与兵衛が親類のために祈ることは「孝行」であり、若い者が先に死ぬことは「不孝」であると次のように語っている。

「出家成就して、御恩の伯母様、情けの親、百年の御寿命過ぎ、めでたく往生あそばさば、御菩提を弔ひ奉るこそ、順とも、孝とも申すべけれ、去年がおかめが憂へを見せ、今年是我らが嘆きをかけ、お心を苦しめ申すこと、罪に罪をぬり長持ち、孝行の元値にはづれ申すなり」³³⁾

つづいて『心中万年草』（第八番目の心中物）における「孝行」について見てみよう。死ぬことが「親不孝」として「祝言の杯の場」のなかの「母親の口説き」という場面と、「心中」の場面において語られている。作右衛門と結婚しなければならなかった娘の梅とその恋人久米之介が心中することを決意するだろうと考え、梅の母親がその思いを断ちきるように説得しようとする場面から見てみよう。母親が次のように言う。

「かならず死ぬるな。死ぬまいぞ、ここは死ぬる場でないぞ。親に嘆きをかけるといひ、その身もない難受けること、親孝行と思はば、かならず死んでくれるなとまつこう言うて止めたらばよもやとは思へども(略)」³⁴⁾

母親の思いは叶わず、久米之介と梅が心中するため逃げ出す。この場面において、梅が「わしは父様、母様の悲しい中にも、不孝者と叱られ」³⁵⁾るだろうと言う。そして梅が母

親の形見を持ちながら、久米之介が父親の遺骨の側で死を迎え、二人は成仏するとある。

『心中万年草』と似た形で、『今宮の心中』(第十番目の心中物)の主人公が「道行」の場面において、死ぬことが「不孝」である次のように考えている。

「私もこなさんも、後には親の枯れ残る、
古い木の老の世は逆様に(中略)不孝の罪、
なんと逃れんあさまし」³⁶⁾

『心中天の網島』(第十二番目の心中物)においても、「万人に死顔さらす身の恥、親はないかも知れねども、もしあれば不孝の罰、仏はおろか地獄へ」³⁷⁾と、死ぬことが「不孝」であるとされている。

『心中刃は氷の朔日』(第九番目の心中物)、『生玉心中』(第十一番目の心中物)、『心中宵庚申』(第十三番目の心中物)において、「孝行」が主人公の死に向かう場面以外においてドラマの展開に深く関わっている。

『心中刃は氷の朔日』において、叔母らのために茶屋へ身を売っている小かんはその動機を孝行の気持ちにあると次のように語る。

「叔母を親の片割れ、こな様達ばかりぢやない。国にござる母様の、孝行と思ひます」³⁸⁾

小かんは遊女になったことも知らず、親が娘の幼なじみの和田伝内を彼女のお迎えに送り、一緒に国へ帰るように手配をしている。しかし、小かんは鍛冶屋で働いている平兵衛と恋愛しており、国元に帰りたくないと言う。その気持ちを知った平兵衛は、「そなたを国へ下さずば親に不孝」³⁹⁾と、国へ帰らないことは「不孝」であると言う。そして、小かんを迎えに来た和田伝内も、彼女なしで帰ることが「不孝」である次のように言う。

「私ばかりすござごと、戻って生きてござろうか、手を出して二親を殺すも同じ不孝人」⁴⁰⁾

小かんは両親にも会いたいが、恋人とも別れたくない。彼女はとりあえず国に帰ると嘘をつく。そして、平兵衛と心中をする。心中の場面において、「孝行」という言葉が出ないが、主人公が二人とも、彼等の死が彼女の家族に対して罪であり、そのために地獄に落ちるかもしれないという認識を表わしている。

『生玉心中』において、茶碗屋の跡取り息子、嘉兵次は遊女さがに恋をしているが、茶屋通いを断念して、おきはと結婚するよう父に迫られる。自分のせいで親に背き「不孝」である嘉兵次を見るさがが

「茶屋の勤めする者は、人の小息子そそのかし、悪道に引入れるの、不孝者にしてのけると、十人が十人で、町の衆は思はんす。涙がこぼれて疎ましい」⁴¹⁾

と嘆き、父親と仲良くするように嘉兵次にすすめる。嘉兵次は父親への「一生の孝行」⁴²⁾と思い、おきはと結婚することを約束する。その約束を守らなければ彼が「不孝」者であるとさがが言う⁴³⁾。二人が親への強い思いを胸に心中に向かう。父親からもらった刃で自殺することが「最後の不孝」⁴⁴⁾であると自覚しながら二人が死ぬ。

『心中宵庚申』は八百屋夫婦の半兵衛とちよの心中を描いている。夫の留守中に、妻ちよが姑に去られ、実家に戻ってくる。用事が終わった夫が帰り道に妻の実家により、そこで事情を聞く。彼が自分にかわって親に妻のちよを離縁させたとして、「不孝者」であると妻の父、島田平右衛門に次のように叱られる。

「その身は実父の弔ひに かこつけ、遠州へ出かはし、その後で姑に追い出させ、養子の親に我あ罪を塗りつくる不孝者」⁴⁵⁾

半兵衛が平右衛門にちよと離縁しないことを約束し、彼女を連れて家に帰るが、

「十五年世話にした、親の嫌ふ女房に、随分と孝行尽し、親には不孝尽しや」⁴⁶⁾と養母に「不孝者」と言われる。それに対して、半兵衛は、彼が自ら妻を離縁することこそ「孝行」であると言ひ、そのため彼女を連れて帰ってきたと次のように養母を説得する。

「御恩の母の気に入らぬ女房なれば、私が離別いたしてこそ、孝行も立ち、世間も立つ、ところにこのたび、国元の留守の間に、八百屋半兵衛が母が嫁を憎んで、姑去りにしたと沙汰あつては、万々ちよめが悪いになされませ、判官鼯鼠の世の中、お前の名外出ませぬ、母の悪名を立てて、若い者の中へ面が出されませうか、親仁様にも面目失はする」⁴⁷⁾

そして、半兵衛はちよと離別し、二人が心中することを決意する。しかし、彼等は二人の死が養母のせいであるという噂が立つことや、親に十分に恩を返さず死んだことを悔やみながら死に向かう。そして一緒に成仏することを願ひ、死ぬ。

近松の心中物において、「孝行」の概念が用いられることによって、主人公たちはただの自己中心の人物としてではなく、まわりの人間への深い感情をもつ者として描き出される。『曾根崎心中』の場合、「孝行」という概念こそ見られないが、二人が死に行く場面において親類への思いが語られている。同じ構想を持つ作品が他にも見られる（『ひぢりめん卯月の紅葉』・『五十年忌歌念仏』・『心中筒井筒』）。その他の作品においては、「孝行」が心中の動機になったり（『心中二枚絵草子』）、主人公たちの行動を方向づけたりしている（『心中刃は氷の朔日』、『生玉心中』、『心中宵庚申』）。また、死ぬことは「不孝」であることが強く意識されている（『卯月の潤色』、『心中万年草』、『今宮の心中』、『心中天の網

島』）。死に行く主人公が（手伝い階級の人ほとんどである）死に追いやった親類・主人に対して反感を持っておらず、反社会的な感情も見られない。広末の指摘した、手伝いレベルの人々の、主人等に対する「抵抗」が描かれておらず、彼らの死の瞬間は親類や主人に対する愛情で満ち溢れているように描かれている。そのなかで「孝行」が彼等の胸のなかの大切な思いとして語られている。「現実」の「生産関係」が近松の心中物と言う言語作品において「反映」されているのではない。現実の諸社会的関係が言語によって把握され、構築され、たえず（再）生産されているとウィリアムズが強調するように、近松の心中物において、「孝心」・「親類や主人への思い」「恩」が描かれ、それによって現実が構築されている。親子関係、主人・手伝い関係は心中を引き起こすが、死ぬ主人公がそれらの関係を重んじて尊敬しているように描かれている。このように作品が言語によって現実の構築を行っている。「享受者」はそういった価値観を受け継ぐかどうか自ら考え行動するが、近松の心中物は「社会的融合」を現実の理解として唱えている。それにも関わらず、主人公が社会のなかに一緒に生きていけず、死ぬ。その死は、一緒に成仏することを動機にもつが、「社会的融合」を破る「不孝」でもあるため、死の先に成仏があるか地獄がまっているかは断言する作品が少ない。

注

- 1) 武井協三 編 『近松門左衛門』 ぺりかん社 1991年
- 2) 広末保 『増補 近松序説 — 近世悲劇の研究』 未来社1963年
- 3) 森修 「歴史社会学派」 『国語と国文学』 1965年
- 4) 前掲書 97頁
- 5) 前掲書 98頁

- 6) 近藤忠義『日本文学原論』新日本出版社 1977年257-271頁
- 7) 荒木繁「戦後の近松研究 — その問題史的展望 —」, 近松研究会編『近松門左衛門 — 研究入門 —』東京大学出版会1956年, 257-275頁
- 8) 森が次の著書を引用している。林基「元禄時代の歴史的意義についての覚書き」『文学』1949年10月号, 遠山茂樹・佐藤進一編『日本史研究入門』東京大学出版会, 1954-1962年。さらに, この点に関しては, 荒木, 前掲書, 259頁も参照。
- 9) 中田易直「近松と町人の世界」『国語と国文学』1955年
- 10) 広末保『広末保著作集 第一巻 元禄文学研究』影書房1996年248-251頁
- 11) 荒木繁「戦後の近松研究 — その問題史的展望 —」, 近松研究会編『近松門左衛門 — 研究入門 —』東京大学出版会1956年, 263頁
- 12) 中田・広末の議論自体およびそれに対する立場を述べた森山重雄の「近松における町人倫理」がある(森山重雄『封建庶民文学の研究』三一書房, 1960年203-233頁)それが近松の「義理・人情」の描き方と密接に結びついているため, その厳密な再検討は, 機会を改めて行いたい。本稿では, こうした再検討の理論的立場を築くためにも役立つと思われる作業を行う。
- 13) 後者の課題の一解決方法として, 森は「文献学」によって「享受者を究明していく」作業が可能であると指摘している。森はこうした作業を自ら行っている。森修『近松門左衛門』三一書房 1959年
- 14) 座談会(鳥越文蔵, 原道雄, 松平進, 武井協三)「近松研究の方法 — これからのテーマ —」武井協三 編『近松門左衛門』ペリかん社 1991年, 16-17頁において, 観客の詳細の究明について次のように指摘されている。「観客の問題が重要にもかかわらず, 研究が遅れている。単発的に研究誌『芸能誌研究』50号』に特集が組まれたりしましたが, それ以後あまり大きな成果はあがっていないように思います」(武井)。
- 15) Michel Foucault, *Les Mots et les Choses* (Ed. Gallimard 1966年) など。
- 16) Louis Althusser, *Pour Marx* (Librarie Francois Maspero 1965年) など。Raymond Williams, *Culture and Society 1780-1950* (Chatto&Windus 1958年) など。
- 17) Richard Wilson “Introduction: Historicising New Historicism” Richard Wilson & Richard Dutton eds. *New Historicism and Renaissance Drama* (Longman 1992年) 11頁
- 18) T・イーグルトン『マルクス主義と文学批評』国書刊行会1987年, 23頁 [原本はTerry Eagleton, *Marxism and Literary Criticism* (Methuen 1976年)]
- 19) Raymond Williams, *Marxism and Literature* (Oxford U.P. 1977年) 4-6頁
- 20) 前掲書 93-94頁
- 21) 前掲書 96-97頁
- 22) 前掲書 37頁。ウィリアムズはここで1920年代にロシアで活躍したマルクス主義者のV. N. ヴォロシノフの唯物史論的言語観 (V.N. Volosinov, *Marxism and the Philosophy of Language*, New York 1973年) を紹介しながら, 論を展開している。
- 23) power と language との関係について, ウィリアムズを出発点とするイギリス側の「新歴史学派」とフーコーを出発点とするアメリカ側の「新歴史学派」の間に相違点も見られる。詳しくはRichard Wilson “Introduction: Historicising New Historicism” Richard Wilson & Richard Dutton eds. *New Historicism and Renaissance Drama* (Longman 1992年) 11-16頁参照。
- 24) Stephen Greenblatt, *Shakespearean Negotiations - The Circulation of Social Energy in Renaissance England* (Claredon Press, 1988年), Jonathan Dollimore “Radical Tragedy - Religion, Ideology and Power in the Drama of Shakespeare and his Contemporaries” (The Harvester Press 1984年), Catherine Belsey *Shakespeare & the Loss of Eden - the Construction of Family Values in Early Modern Culture* (Macmillan 1999年)。
- 25) 森修・鳥越文蔵・長友千代治校注・訳『近松門左衛門集 1』82頁
- 26) 前掲書 83頁
- 27) 前掲書 187頁

- 28) 前掲書 189頁
- 29) 前掲書 179頁
- 30) 前掲書 226－227頁
- 31) 前掲書 344頁
- 32) 前掲書 346頁
- 33) 前掲書 349頁
- 34) 前掲書 420頁
- 35) 前掲書 432頁
- 36) 鳥越文蔵校注・訳『近松門左衛門集 2』110
頁
- 37) 前掲書 473頁
- 38) 森修・鳥越文蔵・長友千代治校注・訳『近松
門左衛門集 1』552頁
- 39) 前掲書 570頁
- 40) 前掲書 579頁
- 41) 鳥越文蔵校注・訳『近松門左衛門集 2』266
頁
- 42) 前掲書 292頁
- 43) 前掲書 295頁
- 44) 前掲書 306頁
- 45) 前掲書 600頁
- 46) 前掲書 607頁
- 47) 前掲書 609頁
- 48) 前掲書 617頁